

第24回（只見高等学校野球部顧問 坂下拓穂）

## 『沢庵 不動智神妙録 池田諭訳』

（たちばな出版）

沢庵（たくあん）とは、戦国時代末期の人物で、一筋に仏教を追求し仏法の実現のために生きぬいた人です。沢庵の一生は、「今の世に順ずれば道に背く、道に背くまじとすれば、世に順ぜず」という彼自身が書いた言葉に尽きます。仏法のために生き、仏法のために闘った沢庵の一生から、「人が人として生きるには、どうすべきか、どうあるべきか」を学ぶことで、「自分が自分になりきり、自分に徹しきるにはどうすべきか」を日々考えながら、福島の高校野球のために生き、福島の高校野球発展のために闘う所存であります。

沢庵の「人に人間としての尊さを感じとらせず、人間として生きる喜びを与えないものは、人間としては未だ未熟だ」という言葉を心に刻み、先人の教えに学びながら、教育に携わる者としてふさわしい人間になりたいと思っています。ここでは、『不動智神妙録』に書かれている内容を一部抜粋して紹介させていただきます。

〈心がとらわれると切られる〉

むみょうじゅうちぼんのう 無明住地煩惱 ※無明とは迷い、住地とは物事に心が止まることを表す。

〈とらわれる心が迷い〉

仏法では、とらわれる心を迷いといい、無明住地煩惱という。

〈不動明王ふどうみょうおうの教え〉

しよぶつふどうち 諸仏不動智という言葉がある。不動智とは、一つの物、一つのことには決してとらわれないこと。誰でも、不動明王ほどに不動智を自分自身のものにすることができれば、どんな悪魔にも負けることはない。

〈とらわれた心は動けない〉

不動明王とは、人の心の動かぬさま、物ごとに止まらぬことを表している。

〈千手観音の不動智〉

不動智を身につけることができれば、たとえ身体に千本の手があったとしても、立派に使いこなせる。

〈無心無念になりきるまで〉

初心の頃の無明と煩惱、それに修行した果ての不動智とが一つとなって、無心無念になりきるができる。最高の地点に到達すれば、何をするにも手足がひとりで動いて、そのことに少しも心をわずらわせないようになる。

〈いたずらならぬ、かかしの姿〉

どのような道を修めるにしても、その極まる所に到達した人の所作をたどった言葉。身体の総てを動かしながら、心はそのどこにもとらわれず、無心無念、かかしのようになれる。

〈心を止めないことが肝要〉

心を物に止めない。素早いというのは、結局心を止めないから早い。

〈不動智を自分のものにする〉

不動智を自分自身のものにしきることを、神とも仏ともいう。

〈心を見極めるには〉

心を明らかに知るためには、ただただ深く考え、工夫するほかない。

〈心はどこにおかぬ〉

心は身体いっぱいに行きわたり、のびひろがる。

〈どこにおかぬばどこにもある〉

心を一つ所に止めないようにすること。どこかに置こうとしなければ、どこにもあるということ。

〈総ての物に心を止めないこと〉

おうむしよじゅうじじょう ごしん  
応無所住而生其心※応無所住而生其心とは、どんなことをする時でも、これをしようと思うと、その、やろうとすることに心が止まる。心を止めずに、やろうという心を持つべきだということ。やろうという心を持たなければ、何事もできないが、心を止めずにやるのを、それぞれの道の名人という。

〈前後の際を断ぜよ〉

〈心の正しくない者は本当の役に立たない〉

〈親がまず身を正せ〉

など